

中村

の歩み

上原祥男

付録

中村の歩み 1

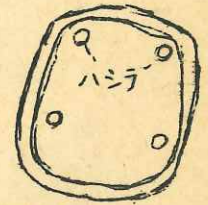
中村の地に、いつごろから人が住むようになったのでしょうか。奪いたもののないころのことは、はっきりとわかりませんが、そのころの人が使った道具などから、そのころの生活のようすを想像することができます。また、道具がどんな地層のところからでてきたかによって、今からどのくらい前のものかがだいたいわかるようになってきました。

原始時代の中村

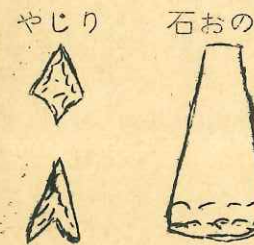
原始時代は、土器のもようや発見された場所、そのころの墓などから、縄文時代・弥生時代・古墳時代にわかれます。この時代は、文字の使用をしなかった時代ですが、古墳の中からは鏡に文字のあるものもあります。また、墓の内部の壁に絵がかかっているものもあります。

縄文時代の遺跡

縄文時代の人々の生活は、狩りと魚とりでしたが、土器をつくることを覚えて、土器の表面に「なわめ」のもようをつけた土器をつくりました。また、家は「たて穴式住居」とよばれるもので、地面に穴をほり、柱をたて、草などで屋根をふいた簡単なものでした。この時代の遺跡は全国にあります。中村にもいくつか発見されています。二つほど紹介します。



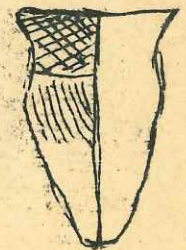
一つは、「山王遺跡」と呼ばれているもので、場所は長田の山王です。時期は縄文時代の中ごろで、築落のあとが見つかりました。標高は100mで、水田より1~2mぐらい高いところの畑地の所です。南側は、現在水田になつています。



ここから発見されたものは、石のやじり、石のおの、石のさら、たたき石、みがき石、土器（加そ利Bが大部分で、阿玉台式などもある）などです。

もう一つは、「薬師堂脇遺跡」と呼ばれているもので、場所は長田の山王です。山王遺跡の西方100mの所にあります。時期は縄文時代の後期といわれています。標高は80mで、水田の高さより1m前後高いところでは、とても低いところにある遺跡です。

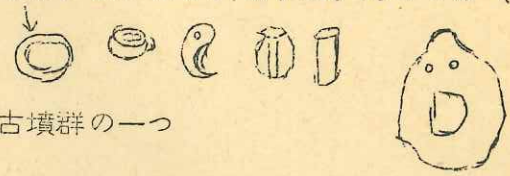
土器



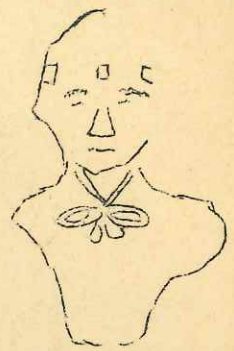
ここから発見されたものは、石のやじり、石のきり、石のおの、たたき石、みがき石、土器（堀之内I・I式が大部分で、加そ利Bなどもあります。）

字名古墳名 形 遺物
 中 天神山 前方後円墳 横穴式石室(単)

: 宮本 円墳 (単)
 若旅 大日塚 円墳 はにわ(単) 直径15m 高さ4.5m
 : 富士北 円墳 金のうでわ、まがたま、切子玉、刀のつば(単)
 : 富士山 円墳 (単)
 : 新田 円墳 (単)
 上大沼 行人塚 円墳 北原台古墳群の一つ
 : 北原台 (群)
 : 浅間山 (単)
 加倉 権現山 前方後円墳 (単)
 : 聖人塚 (単)
 下大沼 稻荷台 円墳 (単)
 大沼 御殿山 (群)
 柳林 浅間山 (群)
 長田 原 (群)
 粕田 行人塚 (単)
 小橋 小宅 前方後円墳 円筒はにわ
 八木岡 円墳 (群) ひょうたん塚が中心



大日塚のはにわ

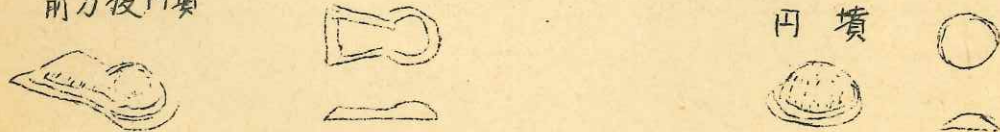


八木岡のひょうたん塚
 場所...真岡市八木岡339 篠崎九平氏宅地内
 年代...6世紀前後

大きさ...東西の長さ 7.3m 周囲の長さ 21.8m
 前方部高さ 4.5m 前方部の長さ 3.6m
 中央部高さ 2.4m 中央部の長さ 3.0m
 後方部高さ 5.4m 後方部長さ 4.5m

ようす...つくられたときのままの完全な形が保存されている古墳である。
 形や大きさでは、芳賀郡市で、最も大きい規模をもっている。
 頂上には、雑木林となっている。後円部に、雷神社と観音堂がある。

前方後円墳



中村の歩み 3

古代社会の中村

伝承時代の中村

朝鮮半島から日本に移住してきた人達は、ことばを文字で表す方法を知っていました。この文字の使用が日本に伝えられると、いろいろなことが書かれるようになりました。その中には、自分達の祖先を「古くから高い地位にいた」ようにいった者達がありました。それらの話を書いてみます。

若旅のおこりの話

若旅は、もとは若ヤマト部とよばれていたといわれる。若ヤマト部というのは、開化天皇の時につくられた部(べ)で、天皇の名の「若ヤマトネコヒコオオビのミコト(若倭根子日子大毘命とかく)の若ヤマトの名をもつ部であると「姓氏家系辞書」にかかっている。その部の長である連(ムラジ)が天智天皇の時に、関東地方や東北地方などの征服に参加して、てがらがあつたので、そのほうびとして各地をもらい、若ヤマト部とその地をよんでいた。

しかし、時間がたつにつれて、「ワカヤマトベ」というよび方が「ワカトビ」にかわり、さらに「ワカタビ」になったといわれている。和銅6年(713)に、諸國の国名・郡名・里名を二字に統一し、嘉字(よい文字)を用いるようにという命令がでたので「若旅」という字を使うように改めたとされている。

若ヤマト部の連は、尾張氏の一族で、若ヤマト部を支配する家がらであった。「天孫本紀」という本には、火明命(ヒアカリノミコト)の五世の孫の建筒草命(タケツツクサノミコト)が、はじめて若ヤマト部部の連になったと書かれている。

八幡宮のおこりと下毛野君

「下銘国誌」には、白鳳4年(676)に天武天皇が諸國に八幡宮を建てさせた時に建てられた。と伝えられていると書かれている。この時、八幡宮を建てたのは、下毛野君であるという説もある。下毛野君は、古墳時代のところで書いた下野国造の奈良別の子孫の氏(名字)である。それから9年後の同13年の正月に下毛野君は朝臣(アソミ)という姓(カバネ・爵位号)を天武天皇からもらった。(朝臣は、真人(マヒト)の次の地位の姓である。)[君]という姓は、允恭天皇の時に開化天皇より前の天皇の血縁のあると祖先を言っていた人々に与えられた姓である。(土地と部全体の首長を指す称号でもある)

このことは、奈良別の子孫と称する人々が、土地を開墾して田畑をひろげて富をたくわえて、その地方で大きな力をもつようになったと考えられる。また

平安時代の中村

平安時代にはいつの中村に関係のありそうな記録は、前にも書いた奈良別の子孫とされる下毛野君の子孫の下野公豊継の妻の記録である。豊継は、芳賀郡の少領（都の次官）であった。妻の名前は書いてないが、前に書いた吉弥侯部氏族の道足（ミチタリ）の娘である。

豊継の妻は、夫の生きていた時は、よく夫につかえ、従順で貞淑であって婦人の模範であった。夫の死後は夫を思う情がきわめて強く、墓の前に仮家を建てて住み、毎日夫を供養するために「光明真言」を唱い、夫の霊をなぐさめた。そのことが、朝廷にわかって、嵯峨天皇の弘仁14年（823）に少初位上の位を授けられた。そして、終身田租の免除をうけ、その標示を門の入口ににかけておいた。と書かれている。その妻の墓が「光明寺節婦の墓」とよばれ若旅の光明寺とあると伝えられている。その場所は東西約18m、南北約10mで、玉石や五輪塔の石があって、ウスラントウとよんでいたと言われていた。

また、当時の村人達は、豊継の妻をかわいそうに思い、毎日のようにその家で一番おいしいものをとどけて、豊継の妻の心をなぐさめたとも伝えられている。（豊継の妻は、日本で最初の女子の授賞者でもある）

弘仁14年に熊野権現が若旅の権現山に建てられた。と伝えられている。熊野権現を建てた人の名は不明であるが、紀州（今の和歌山県）の熊野山をうったものである。（熊野は山岳の地なので、数多くの神秘的な伝承をもっていて、平安時代に熊野三山の形ができたといわれている）

天長9年（832）東福院別当坊妙法寺が慈覚大師の開山で建てられたという（今の莊嚴寺のもと、莊嚴寺についてはあとで記す）場所は、寺内の東宿にある。慈覚大師が建てたと伝えられる寺は全国各地にあって数多い。

慈覚大師は、崇神天皇の第一皇子の豊城入彦命（トヨキイリヒコノミコト）が、東国を調べた時、皇子の二男が壬生に住みついた者の子孫であると伝えられている。生まれは、延暦13年（794）で、幼年の時に父が死亡して母に育てられ、九歳の時に仏教の道を志し、大同3年（808）比叡山に登って最澄の弟子となり、最澄が弘仁13年に死亡した時、12年間山にこもって修業するよという遺言があったので、山で修行をした。6年後に「師の法を広く世間に広めるべきだ」という意見が山中におこったので、慈覚大師は布教活動をする。この間が五年間である。（健康を害したため）

下毛野君のかきべ（氏に従っていた集団で、氏の仕事をしたり、農業をしごとをしたりする人々）は「君子部（キミコベ）」とよばれていた。それらのかきべのよび名が、天平宝字元年（757）に「吉侯部（キミコベ）」とかわった。それから8年後の天平神護元年（765）3月に、吉侯部根麻呂は従五位下となると同時に、下毛野君という姓もつけた。このことは、下毛野君に属していた前からの豪族たちの子孫が、土地を開墾して田畑をふやし、経済的に豊かになり、かきべの長が奈良の朝廷に認められるようになったのではないかと考えられる。

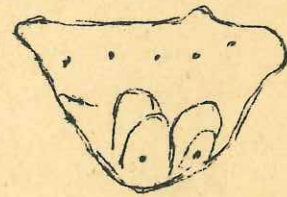
石田郷について

奈良時代は、仏教の盛んな時代である。特に仏教に熱心だった聖武天皇は、奈良に東大寺を建てその寺領として、土地を東大寺に寄付したことが、天平勝字4年（752）の日付のある記録に残されている。その中に「芳賀郡石田郷50戸」の記録を見ることができる。この石田郷が、今のどこであるのかははっきりしていないが吉侯部氏のことを朝廷の記録に見えることから、現在の中村の内のどこかではないかと考える。（寺内や寺分の地名のおこりではないだろうか。また、粕田や中里坪に石田という地名もある。）
貞観3(871)安祥寺資財帳 墾田20町 畑2町

吉弥侯部氏の姓

奈良時代の末になると、吉弥侯部の実力が朝廷に認められたのか、延暦2年（783）3月に、従五位下の横刀と正八位下の夜須麻呂（親子か）が下毛野朝臣の称号をもらい、一方、正八位上の間人と総麻呂（これも親子か）は下毛野君の称号をもらっている。このことから、奈良別の子孫のかきべであった吉弥侯部が、主人の称号をもらっていることになる。なぜ、そのようなことが行われたのだろうか、奈良時代の末になると、公地公民の制度が崩れはじめて、朝廷の収入がへってきた。その時、朝廷にいろいろな物を納めたので、そのお返しのためではないか。

また、間木堀から、奈良時代の瓦の模様といわれる巴（ともえ）と唐草（からくさ）の模様のある瓦が発見されている。この場所は、寺院のあとか、郡の役所のあとははっきりしていないが、東西三百間（約540m）南北五百間（約900m）の規模をもつ建物である。



中村の伝承

「姓氏家系辞書」に書かれている記録によると、中臣氏の一族から中村連を称する者がでて、その人達が鬼怒川をのぼってきて、間木堀に住むようになって、中村とよぶようになったといわれている。しかし、吉弥侯部の一族の豊庭が、神護景雲3年（769）に中村公の姓をうけている。（不明）

源氏と中村八幡宮

1 永承6年(1051)、東北地方に大きな勢力をもっていた安倍(アベ)頼時が子の貞任・宗任(ムネトウ)と共に衣川(コロモガワ)の館を中心に朝廷の命令をきかなくなった。しかし、東北地方を治めていた国司はこれを鎮めることができなかった。それから4年後の天喜4年(1056)8月3日に、朝廷は源頼義に命令して安倍頼時等を討たせた。源頼義は陸奥(ムツ)の鎮守府将軍(チンジュフショウグン)の職について、子の義家(八幡太郎とよばれている人)と共に頼時を討つために東北地方にむかったが、この時中村の八幡宮にたちよって勝利の祈願をしたと伝えられている。

また、一方の伝えでは、頼義・義家の父子は、陸奥に行く途中、中村の妙法寺に宿営して勝利の祈願したといわれている。(当時の人々は、神社を中心に大きく団結していたと考えられる。また、寺には寺領があって、そこに住む人々を治めていたと考えられるので、神社や寺によって祈願することは、人数を集めるに役立ったと思われる)

頼義は、天喜5年に安倍頼時を攻めて殺すことに成功したが、子の貞任・宗任の兄弟は衣川やクリヤ川の館にこもって抵抗した。康平5年(1062)に清原武則(タケノリ)が頼義に味方したので鎮めることができた。同6年に頼義が陸奥からの帰京の途中に、中村に宿営して、八幡宮の恩を謝して、八幡宮社殿を再建するとともに、妙法寺の大御堂の再興をしたと伝えられている。

中村氏のおこり

奈良時代の石田郷も、文徳天皇の御代(850)から寺院が廃退してきて、平安時代の末には安祥寺の荘園としての実質が失なわれていた。

藤原陰の六世の孫の実宗が、天永2年(1111)に常陸介(ヒタチノスケ・介は次官)となって、常陸国真壁郡伊佐荘中村(今の下館市中村)に住み、これから後は、伊佐または中村氏を名のる。その子の秀宗(山尾蔵人・ヤマオクランドと名のる)が下野守(守は長官)となって芳賀郡に住み、その所を中村に改めたといわれている。任期が終わると伊佐荘の下館に住んだので下館侍従とよばれた。(保安元年・1120ごろ)

その後、助宗(または家周・イエナカ)は、大舍人(オオドネリ・天皇に仕えて宮中の政務を行う者の職の名)となったが、中村に関する記録は見当たらない。次に、光隆が中村を管理するが、待賢門非蔵人となるが記録ははっきりしない。

光隆の子の朝宗は高松院(二条天皇の皇后)の蔵人で従五位下であり、院の判官代(院の三番目の役職の代理)で、遠江守や東宮(トウグウ・皇太子)の帯刀(タテワキ・守護した武官のこと)、常陸介であった。保元元年(1156)から下野国芳賀郡中村にきて住み、八幡宮の南東の所に館をつくって中村荘を管理する。以後は中村太郎と名のるようになる。そして、承安年間(1171~74)に荘厳寺を再興したと伝えられている。

中村の歩み 5

中世社会の中村

中世の社会は、源頼朝が文治元年(1185)3月24日に、平氏の人々を壇の浦でほろぼし、同年11月29日に「諸国に守護(普通の時は国内の警備の仕事をし、戦いの時は家来を率いて戦いにのぞむ)と地頭(土地の管理・年貢のとり立て・警察の仕事)をおくこと」を認められ、武士が政治の実権をもっていた社会である。この社会の特色は、土地をなかだちとした主従関係を基とした社会である。

建久3年(1192)7月12日に、源頼朝が征夷大將軍に任命されて、鎌倉に幕府(武士の政府)を始めてからを武士による政治の始めとしているが、実際には、鎌倉幕府の日記といわれている「吾妻鏡」の記事は、治承4年(1180)4月から書かれている。

鎌倉幕府がほろんだのちに、足利氏を將軍とする室町幕府ができるが、將軍義政のあとつぎ争いから応仁の乱となり、この乱をきっかけとして各地に戦国の武將がおこり、自分の領地をふやすために戦う戦国時代となっていく。

中村荘の記録

中村荘に関する記事を「吾妻鏡」の中からさがすと、文治3年3月17日に院(天皇の位を譲った人)から「京大寺の造営のための材木がなくなったので集めてほしい」という要望があったので、これをひきうけたという返事をだした。そのあとに、前々から荘の持主をはっきりさせてほしいとおねがいしてあったけれども、まだ返事がないので、早く調べてほしいと、いくつかの荘の名前を書いておくっている。その中に

1、下野国 中泉 中村 塩谷等の荘の事

ここに書いた荘は、没官(とりあげた荘)の中にははいっていないが、関東にあるので自然に領地としてきた。この荘園は、年貢を納めなくてもよいのであるが、本家がだれであるかわからない。本家がだれであるのか調査をしてほしい。(中村荘に関することだけの要約)とある。

この荘園の持主さがしの返事が4月12日にとどいた。それによると

1、下野国仲村、仲泉、塩谷三ヶ所の事

前摂政家(基通・モトミチ)より申しでた領地所有の証書に間違いがないので、基通家の家領である。と書かれている。

さらに、6月4日には、頼朝が前に出した荘園の本家のことについて、こまごまとした返事がとどいた。中村荘に関することだけを要約すると

1、下野国中泉、中村、塩谷荘の事

以上3カ所は前摂政家の領地である。年貢は棟範（ムネノリ）の所に連絡して送るよう。とある。寿永3(1184)年22~文治2(1186)年12日

以上のことから、中村荘は藤原基通の荘園となっていたが、文治3年に頼朝が荘園の所有者を調べたところ、だれの所有地かわからなかった。そこで、頼朝が、荘園の記録を調べてもらうとともに、本当の所有者の確認をしたのが、これらの日附の手紙である。

いつから藤原氏の荘園になったのかは不明であるが、文治3年の時に本家の名がわからなくなったことから考えて、かなり古い時期であったろう。また、荘園を管理していた者の名前の記録はないが、中村の歩ゆ4で書いたように中村氏が管理していたものと考えられる。

中村荘が、藤原氏の荘園としてこのあとどれくらい続いていくかは不明であるが、本家がわかったあとの交渉で、中村氏の領地になっていったと思われる。その後の中村荘についての記録は、「下野国誌」の中村八幡宮の条にある。それは、源頼朝が建久4年(1193)6月21日に社領を寄附した簡札の図があり長さ9寸6分、横幅6寸5分とある。(1寸は3センチメートル)

下野国芳賀郡中村庄
八幡宮奇進申田事
合田三十三丁
右所実如件
鎌倉右大将頼朝 花押
建久四年六月二十一日

また、荘厳寺に頼朝からの寄附の朱印状の写しがあると「芳南郷土誌」にある。(建久4年の日付)

下野国芳賀郡遠中村
莊厳寺 同妙法寺
伊予守頼朝御願依為御寺
天下 諸役神 役 等 重寄
進申 田 事
合田 三十町
鎌倉右大将頼朝 判
建久四年
衆徒十七坊
承仕二人

中村の歩み 6

中村氏の記録

中村氏に関する系図は残されていないが、中村氏からわかれて活躍した伊達の系図が「寛政重修諸家譜」の762巻にのっている。それを書くと次のようである。

朝宗 トモムネ 高松院非蔵人 従五位下 入道号念西 あるいは院判官代 遠江守とし、あるいは東宮帯刀常陸守に作る。母は源為義の娘美濃局

文治5年(1189)8月頼朝將軍が泰衡を征伐のとき、子の為宗等四人が陸奥国において戦功があつたので伊達郡をもらう。この年高子岡に城を築いてここに住む。先に伊佐あるいは中村を称していたが、これからは伊達にあらためる。71歳で死亡する。(年号不明) 正治元年10月2日

為宗 オサムネ 常陸冠者 皇后宮大進 あるいは大舎人頭 伊佐を称する

文治5年8月8日泰衡の兵と戦い、佐藤庄司および宗徒(一族)の兵18人の首を得て、阿津賀志山の経岡にさらす。

宗村 ムネムラ 次郎 従五位下 吾妻鏡は為重(タメシゲ)に作り、あるいは安芸守に作る。建久4年10月2日?

文治5年泰衡征伐のとき、兄為宗とともに戦功あり。

時綱 トキツナ 与一 修理亮

義広 ヨシヒロ 栗野次郎 蔵人大輔(蔵人大夫) 従五位下 入道号覚仏 あるいは伊達判官代

伊達郡桑折の郷栗野大館にうつり住む、のち出家して覚仏とあらため、康元元年(1259)9月23日死亡する年72歳。

政依 マサヨリ 蔵人太郎 伊達二郎 蔵人大夫 従五位下 入道号願西 あるいは号を護法菴(アン)

一記事略一正安3年(1301)7月9日死亡する。年不明 75歳

資綱 スケツネ 常陸三郎 蔵人

常陸國中村の庄を領す。文治5年8月泰衡征伐のとき、伊達郡石那坂において敵とたたかい、創(キズ)をうけて有名となる。

為家 タメイエ 常陸四郎 左衛門蔵人 吾妻鏡は右衛門尉に作る

文治5年8月兄資綱とともに石那坂において戦功あり、創をうける 建暦2年(1212)6月7日鎌倉にいて侍所で宿直のとき萩生右馬允

と争論し刃傷になったので、佐渡国に流され、のちゆるされる。

—為行 タメユキ 出雲守

—実綱 サネツナ 六郎

伊達郡伊達崎村に住んだので伊達崎と称し、のち田手と称す。

—延巖 エンゲン 権少僧都

—朝基 トモモト 八郎

建長5年10月23日鎌倉御所小侍番帳に入る。

—為保 タメヤス 蔵人大夫 寺本を称す。

—女子 頼朝将軍の妾となり、大進の局と称す。理由があって京都にうつり、建久2年正月23日伊勢国の土地をもらう。のち尼となり、大進尼と号し、伊達郡山戸田村に隠居する。

「吾妻鏡」に中村氏に関係のあることが書かれているのは、文治3年3月30日である。伊勢大神宮に奉幣（神にお供えものをする）する公家がおるとき通行の手助けを命令された庄の名が71かかっているが、その中に「三ヶ山庄常陸三郎（28番目）と松高名庄常陸太郎（70番目）」がある。

系図にも書かれている頼朝の泰衡征伐の記録が「吾妻鏡」にある。7月19日に鎌倉を出発したが、その時の部将名が144名かかれています、その83番と84番に「常陸次郎為重・同三郎資綱」の名がかかれています。

8月8日、阿津賀志山の戦いで敗れた佐藤庄司らが石那坂の上に陣をおいて堀を掘り河の水を入れ、さくをつくり石弓をもって討手を待っていた。これを攻めたのが中村氏の一族である。この戦いを要約すると

「常陸入道念西の子供の常陸冠者為宗、同次郎為重、同三郎資綱、同四郎為家等、よろいやかぶとを馬の飼の中に入れて、ひそかに伊達郡沢原辺に進んで石那坂に攻めのぼって矢石を発す。佐藤庄司等は死をおそれずに反撃した。為重、資綱、為家等は傷ついたが、為宗はとくに死ぬことをかくごして攻めたので、庄司以下の一族の者の首を18とることができた。そして、その首を経岡にさらした」と書かれている。

9月20日 泰衡の征伐もおわったので、勇士のてがらをはっきりさせて、各々に賞を頼朝が与えた。その中に「皆、数カ所の領地をもらう」と書かれているがその人々の名前は書かれていない。また、「この外の賞もたくさんあつてかぞえることができない」と書かれている。

この時念西は「陸奥国の信夫（シノブ）伊達（ダテ）両郡の土地をもらい、伊達の地頭職」となった。

中 中 の 歩 み 7

中 村 氏 一 族 の 記 録

中村氏が伊達郡を支配して伊達氏を称するようになるが、一族の総領（ソウリョウ・あとつぎ）の為宗は本領である伊佐にもどって住んだ。為宗についての記録を「吾妻鏡」よりぬき出してみると

建久4年5月1日に、鹿島社は20年に一度は造営し遷宮することになっていた。去年で20年になったが社領を知行している人たちが造営を怠けておくれたしまった。そこで、伊佐為宗と小栗重成らを造営奉行に任命して造営をいそがせた。そして、八田右衛門尉知家を使いとして、7月10日の祭日の前までにおわるようにという命令を伝えた。

同5年6月10日、去年横山権守時広から献上された馬があまりよくなかったので、皇后宮大進為宗の家来の源五七郎に命じて奥州に流させたところ馬がふばれたといって射殺してしまい、その後どこかにかくれていた。為宗は源五七郎のいどころをさがしていたが、みつけて鎌倉の屋敷につれてきたことを連絡したので、左衛門尉義盛がひきとりにいった。

同年門8月8日、御台所（頼朝の妻の政子）は仏事（法事）の最後の日であり、さらに志水冠者の追福（死者の幸福を祈って法事をする）のための副供養をするために出かけた。この時5名の者が従ったが、その最初に皇后大進為宗の名がかかれています。

同年12月26日 永福寺内に薬師堂を新造したのでその供養を行った。この時、將軍頼朝に従った人々の名があるが、布施取役が9名おり、その4番目に皇后宮大進大夫為宗の名がある。

以上の記録から考えて、為宗は伊佐庄を支配するとともに、鎌倉に住んでいて將軍や御台所のおともをしたことがわかる。

次に、三男の伊佐三郎についての記録を「吾妻鏡」よりぬき出してみると建久元年11月7日 鎌倉を出発した頼朝將軍が京都にはいり六波らに着いたが、その行列に参加した人々の名がかかれています、先陣は横三列で六十番まであり計180名の名がかかれています。その34番目の下の段（右側）に伊佐三郎の名がある。

同2年2月4日 頼朝が鶴岡八幡宮に参詣したが、この時頼朝に従った人達の名が26名かかれています、その23番目に伊佐三郎の名がある。

同6年2月14日 頼朝は東大寺の供養のため鎌倉を出発した（御台所の政子や男女の子供といっしょに）そして、3月10日に東大寺にむかうが、その先陣（横3列・縦39列）の23番目の下（右）に伊佐三郎の名がある。
先陣の随軍の随兵9番目に常陸四郎（下）次の随兵16番目に伊達次郎

承久3年(1221)6月6日 東海道を進んだ武蔵太郎の軍が摩免戸川(マメト)で官軍と戦った。官軍は幕府軍に破れて逃げたが、山田次郎重忠は独り残ってがんばっていた。これを見て伊佐三郎が山田と戦って破ったので、

そのほか、伊佐氏を称していた人達は

承久3年6月14日 東海道を進んだ軍勢が宇治川を渡って京都にはいろいろとした。しかし、昨日の雨で川が増水していたので川を渡ろうとした96人の武将が死亡し、家来は800余騎死んだとかかかっているが、その中に伊佐大進太郎の名がある。(為宗の子だろう)

安貞2年(1228)7月23日 將軍頼経が駿河守義村の家敷へ秋の景色を見に出かけたが、その行列のわきに左右10名ずつの計20名の名がかかっているが、その左側の最後に伊佐兵衛尉の名がある。(資綱か)

宗村についての記事は、たった一つである。このことは、陸奥の征伐が終わったといっても、まだまだ完全な支配がおこなわれていなかったもので、伊達郡に住んでいる期間が長かったためだろう。その記事は

建久6年3月10日の京大寺の供養の時の行列の中で、後の随兵(横3列、縦41番)の16番目の下(右)に伊達次郎の名がある。

為家についての記事はかなり多く、そのよび名も常陸・伊達・伊佐といろいろである。この年数を調べてみると伊佐氏の移りかわりがわかるような気がする。伊佐氏は、はじめ為宗の子がついだが、承久3年に死んだため、為家が後見人か、実質的な後継者になったのだろう。年代順に記事を書くと、

建久元年11月7日 將軍頼朝の後障46番(各番3名)の32番の下の段段に常陸平四郎の名がある。

同2年2月4日 將軍頼朝の鶴岡八幡宮の参詣の行列に従った者の名が26名かかっているが、その24番目に伊達四郎の名がある。

同3年5月19日 頼家が常陸平四郎の家敷(由井にあった)から京都に向けて出発した。(頼家に従って上京する人々も前夜あつまる)

同6年3月10日 京大寺供養の行列の先障39番の9番目の下に常陸四郎の名がある。

建暦2年(1212)6月7日 御所の侍所の宿直だった伊達四郎為家と萩生右馬充が争いをおこし、両方の家来が一人ずつ即死し、傷をした者が二人だったこのため鎌倉中の騒ぎとなったので御家人があつまった。翌8日伊達は佐渡国萩生は日向国に流された。(御所内の争いのため刑が早くきまった)

建保7年(1219)正月27日 実朝が右大臣になったので、鶴岡八幡宮に参拝した。その行列の中に伊達右衛門尉為家の名がある。

嘉禎3年(1237)3月8日 主計頭師員を奉行として近習の番と護身の陰陽師の人を定めた。近習の人々は1~3番まで各番とも6名であった。その2番の最後に伊佐右衛門尉の名がある。伊佐大進太郎の子? 為宗の子? 為家の子?

同4年2月17日 正月28日に鎌倉を出発した將軍藤原頼経が六波らの御所についた。この随兵の数が192騎であった。(64番、横3列)3騎ずつならんで各々弓袋差一人、徒歩の者三人の計四人をつれてきた。その7番の中央に伊佐四郎蔵人の名がある。

仁治元年(1240)8月2日 將軍頼経は二カ所に参詣する。まず、鶴岡八幡宮に参詣し、鳥居の内で参拝する。この時の行列の中で「カゴ」の左右を歩いた者の名が11名かかっているが、その最後に伊佐右衛門尉の名がある。

朝基の記事と思われるものが三つあるのでそれを書くと

嘉禎4年2月17日 京都の六波らについて將軍頼経の随兵64番(192)の34番の上(左)に伊達八郎太郎の名がある。

仁治4年正月10日 御弓始めの儀式があり。その射手の2番目に中村(伊達)太郎の名がある。

建長5年(1253)10月23日 小侍番帳にはいる。

朝宗の娘の記事もあるのでそれを書くと

建久2年正月23日 頼朝の女房の大進局は伊達常陸入道念西の娘である。大進局は頼朝の若公の貞暁を生んだことが政子にわかってしまったので、京都に住むように命ぜられていたが、領地を近くの国の伊勢国で与えられた。

義広についての記時は一つである

嘉禎4年2月17日 京都の六波らについて將軍頼経の随兵の34番の下に、伊達判官代の名がある。

政依に関係あると思われる記事をあげると

建長2年3月1日 閑院殿を造営するための分担がきめられたが、その中に蔵人町の後のへい25間のうち15間をわりあてられた。(門が3つある)その時の記事は伊達入道跡とあるだけである。(父の義広が出家したが、まだ正式に後継者として認められていなかったためだろう)

建長4年8月1日 宗尊親王が征夷大將軍に任命されたので、お礼として鶴岡八幡宮に参拝した。その時、直垂(ヒタタレ)を着て従った者が20名いたが、その17番目に伊達次郎の名がある。

同年同月6日、將軍が御方違なので出かけたが、その時徒歩で従った者が6名いるが、その5番目に伊達次郎の名がある。

正嘉元年(1257)10月1日 大慈寺の供養がおこなわれ、將軍宗尊親王が参拝したが、布施取20名の名がかかれ19番目に伊達左衛門尉親長の名がある。

弘安7年(1284)北条左近将監時國伊佐郡に流さる

(親長という名は系図にはないが政依の別名だと考えられる。)

莊巖寺のおこり

莊巖寺は、承安年間(1171~74)に中村常陸介藤原朝宗が本願となって、東福院別当坊妙法寺を再興した。この時の開山が莊巖坊行勇という人である。以後、開山した莊巖坊の名をとって「大御堂東福院莊巖寺」と称するようになった、といわれている。

莊巖坊についての記事を「吾妻鏡」や「莊巖寺縁起」からぬきだすと

建久4年3月25日 武蔵国の入間郡で狩りをした後、那須野に向ったがその途中で莊巖寺に寺領30町を寄進したとあり、そのころ僧の行勇がこの寺に住んでいて莊巖坊と称していた、という。(中村の歩み5の誓状より)

建仁中(1201~03) 莊巖坊は千明院(寺内)神宮寺(中村)覚善寺(中里)一乗院(中里)明光院(大和田)普門院(下大沼)宝性院(粕田)観音寺(上大沼)福性寺(長田)清水寺(柳林)の門徒10カ院をつくって莊巖寺の規模をひろげた。と伝えられている。

承元4年(1210)7月8日 金吾将軍(頼家)の室が髪をおろして仏門にはいる。戒師は莊巖坊行勇である。行勇は若宮の供僧から寿福寺の長老となった人である。

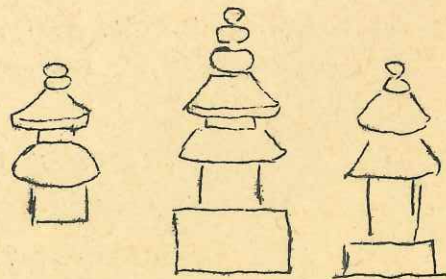
安貞元年(1227) 頼経将軍が病気のため各神社や寺院で祈等をする。

4月29日に莊巖坊律師は「仏眼護摩」の修法をする。

嘉禎元年(1235)12月24日 将軍が病気のためお祈りをしたが、莊巖坊は「不動護摩」の祈りをする。

仁治元年(1240)12月21日 前武州が評定衆の人々と右大将家の法華堂で法事をしたが、この時、莊巖坊僧都行勇を導師としている。

莊巖寺縁起によると「境内の西北に多重塔が数基と五輪塔がある。この石塔は源頼朝の供養の石塔である、と伝えられている」これは、頼朝の祈願所として寺領や仏像の寄進をうけていたので、頼朝の死後その供養修法を行うために石塔を建てたのであろう。



中村の歩み 8

伊佐領から小栗領へ

伊佐氏の記録は、鎌倉時代の中ごろから見えなくなり、だれが領主であったか不明であるが、「太平記」の9巻に伊佐氏の一族の名が見える。

元弘3年(1333)5月7日足利高氏(建武の新政以後尊氏)らが天皇に味方して、京都の六波らを攻めたとき、伊佐氏の一族は六波らにいた。六波ら探題の北条時益が死んだので、北条越後守仲時らが光厳天皇を奉じて京に向かった。しかし後醍醐天皇に味方する者が多くなり、同月9日に光厳天皇を奉じていた人々432名が討死した。そのうち156名の名前が誓われている。その93~95番目に、伊佐治部丞・同孫八・同三郎の名前がある。

このため、伊佐氏の所領は没収され小栗氏に与えられたと思われる。その時期は不明であるが、建武2年(1335)4月10日付の後醍醐天皇の命令誓の中に、「中村荘12郷の地頭、小栗掃部助重貞」の名前があるので、建武元年8月5日の論功行賞の時と考えられる。次にその命令誓の誓いてみる。

下野国長沼荘用水亭、停止同国中村荘地頭小栗掃部助重貞違乱、任先例可全耕作業者
天気如此 悉之以状
4月10日
長沼判官 殿 (秀行) 右中将

小栗氏については、「大日本地名辞書」の小栗城の所に「北条時行に与党す」とあるので、年表などを参考にして、北条時行らの動きを誓くと、

「7月14日、諏訪頼重が北条時行を大将として、天皇に反乱の兵を信濃にあげた。そのあと、天皇の政治に不満な武士が続々と集まり、22日には、5万余騎を率いて武蔵国にはいり、足利直義の軍勢を井出沢で破り、24日には、佐竹義篤の軍勢と武蔵国の鶴見で戦って破り、翌25日、時行の軍勢は鎌倉にはいった。(中先代の乱という)」

この乱のため、8月18日、京都から鎌倉に向った足利尊氏の軍勢は、北条時行の軍勢を相模川で破り、翌19日、尊氏らは鎌倉にはいった。この時、小栗重貞は時行の部将の名越時兼を切り尊氏に降参した。このため、小栗氏の所領はへらされなかった。

同3年2月、伊達宮内大輔行朝は中村八幡宮の社頭を修営したと伝えられている。これは、伊佐氏の一族のようすを見にきた伊達氏の家来が、伊佐一族を一つにまとめ、伊佐氏の復興を考えたためと思われる。その中心となったのが伊佐太郎経長で、伊達氏を助ける体制がつけられたろう。

延元2年(建武4年・1337)北畠顯家は、義良親王を大将として伊達行朝ら西に進み、12月23日足利義詮(ヨシアキ・尊氏の子)を攻めて鎌倉を落とし、翌年正月2日に鎌倉を出発した。この時、伊佐氏の人々伊達氏の家来として参加したと思われる。

延元3年9月3日、南朝方(後醍醐天皇方)は勢力をもりかえすために、伊勢を船出して京国に向った。しかし、11日に台風に合わせて船がばらばらとなり、北畠親房らの乗った船だけが常陸国の京条浦に流れ着いた。そして、南朝に味方する人々を集めて、翌年2月27日には、春日中将顕時を大将として、常陸・下野国の北朝方の城を攻撃した。(太平記では、各地の武士はことごとく天皇に味方して一斉に兵をあげた、と書かれている)伊佐太郎の名あり

興國2年(暦応4年・1341)北朝軍は、高師冬を大将として常陸国にはいった。そして6月16日に北畠親房の守る小田城を攻めたが、23日には破れた。一方、南朝方の軍勢は下野国に兵を進めて飛山城(芳賀氏の居城)を8月1日攻めおとした。しかし、勢力をもりかえした北朝軍は、高師冬を大将として、南朝方の佐倉・京条・亀谷などの城を攻めおとし、小田城を攻めた。11月10日、小田城主の小田治久が高師冬に味方する気持ちをみせたので、興良親王や北畠顯時は大宝城に、北畠親房は関城に移った。12月8日には、高師冬の軍勢が大宝・関の二城を攻撃した。

この間の伊達行朝は、伊佐城にはいって寛成親王が小田城に入るのを助けた。南朝方のための食料の供給に力を入れていた。尊氏からは、再三再四味方になるようにいわれたが、それをことわって南朝のために活躍したので、武士としては珍しい「従四位下」の位をもらった。(伊佐氏の人々は伊達行朝を助けて活躍したと思われる)

この間の小栗氏についての記録がないので書けないが、北朝方として活躍していたと考えられる。

同4年(康永元年)4月2日、北畠顯時の軍は大宝城を出て関城を包囲していた結城勢を破った。これと行動を共にするように、同月5日、伊達行朝は伊佐城を出て北朝軍を破った。しかし、南朝軍の優勢は、結城親朝の援助や出陣を期待しての活躍だった。8月19日、結城親朝が尊氏のさそいに応じて兵をあげた。このことは、北朝方に力をつけ、11月11日に関・大宝の両城が落ちて関宗祐、下妻政泰が戦死した。高師冬の軍が伊佐城を攻めたので、伊達行朝と伊佐太郎らは城を出て泉村で戦って破れた。伊達行朝は結城直光に降伏したという説がある。(行朝は正平3年・貞和4年・1348年5月9日死す—寛政重修諸家譜)伊佐太郎は経長は宇都宮公綱の家来となった。(中村・茅堤・大沼等を領したと伝えられているが疑問が残る。小栗氏との関係が不明)

小栗氏についての記録

はじめに、中村荘の地頭と思われる人々の系図を書いてみると次のようである
重貞—詮重(ノリシゲ・遠江守)—行重(氏重・五郎)—基重(小次郎)—満重(孫次郎)—助重(常陸介)大日本地名辞書。

満重に関係のある記録があるので、これを書いてみる

応永23年(1416)10月2日、前の関東管領の上杉禅秀(氏憲)らは関東公方の足利持氏のやり方に反対して持氏を攻めた。この時、小栗満重は禅秀に味方した。この乱は翌年正月10日に細川満元がきて鎮めた。(禅秀らの自殺でおわる。禅秀の乱)しかし、これをきっかけとして、関東地方は戦乱が続くのである。

すなわち、上杉禅秀らの人々に対する処置(領地の没収)に不満な人々が、同24年と25年におこした。このようすを皆川文書からぬき書きすると

桃井左馬権頭入道 小栗常陸孫次郎等依陰謀露頭
令没落上者 不日差遣勢、可加退治之状 如件
応永25年5月10日

以上の文書からもわかるように、足利持氏は関東の武將に桃井、小栗氏らの反抗を知らせ、両氏を攻めるように命令している。一方、桃井、小栗の両氏らは、小栗城にたてこもった。この時に、小栗氏の領地は取りあげられたが、実際には小栗氏が支配していた。持氏は、上杉定頼を大将として小栗城を攻めさせたので、6月に降参した。持氏は領地の一部を没収して許した。

同29年5月 再び小栗城に岩松氏の残党らと共に持氏に反対の兵をあげた。6月13日、持氏は小山左馬助満泰に命じて攻めさせた。8月になると、宇都宮持綱、桃井宣義らが小栗満重に味方して勢が強くなった。そこで持氏は、上杉定頼を大将として攻めさせた。同年11月になって上杉・小山の軍勢は小栗勢を破った。(翌30年2月2日、小山満泰は持氏から賞されている)30年になっても完全に小栗氏を降伏させることができなかったので、5月28日に持氏が結城城にきて小栗満重攻撃の指揮をとった。6月25日に諸軍に命令して攻撃させたので、18月2日に小栗城が落ちた。しかし、満重と子の助重らは城を出て三河に逃げた。(鎌倉大草子、南方紀伝は1日)この結果、小栗が所有していた領地はとりあげられ、結城氏が管理することになったと思われる。それは、長沼氏への連絡が結城氏を通して行われていることから考えられる。

長沼氏の活躍のようすが県史にのっている、それによると「代官、親類皆河六郎の傷のほか、家人や一族も討死している。活躍は立派である」とある。

結城氏の記録

中村を領して、伊佐氏を家来としたと思われる結城氏も、足利持氏が幕府に反抗したことから一時、没落する。そのようなすを奮ってみると、

永享10年(1438)6月に持氏の嫡子が元服したが、將軍の一字をもらう先例を破った。そのため、幕府や上杉憲実(関東管領)と対立するようになり、將軍義教の命令を受けた憲実が持氏を捕えた。関東の大名13名が助命の誓状を出したが、同11年2月に持氏が自殺した。持氏の子供らは逃げた。

同12年正月、持氏の遺子の春王、安王、永寿王らは父のうらみをはらしたいと、結城氏朝を頼ってきた。この時、伊達行朝の四世の孫政国は氏朝に味方した。(功績によって旧領の復興を思う)これをきいて、上杉清方が大将となって結城を攻めた。4月10日には関東の武将に連絡した。7月29日、上杉清方、同持朝、千葉貞胤らが結城城を包囲した。12月12日、氏朝の弟山川氏義が上杉清方に降る気持を持ったので、結城勢の勢いは弱くなった。

同13年正月1日 結城勢は城を出て戦ったが包囲軍を破るまでにはいかず、改元して嘉吉となった4月16日に結城城は落ち、氏朝は40歳で自殺し、一族の人々も討死や自殺した。この時、伊達政国も死す。(政国は伊達ではなく伊佐一族のような気がする)この戦いに、奥陸の伊達持氏は参加しなかったので責められた。

一方、小栗氏は、満重が応永33年3月16日に死に、子の助重が小栗一族の長となっていたが、旧領を復してもらおうためおおいに戦ったらしく、主人としていた下総守が認めた誓状によって旧領地をもらったらしい。そして、三河にいた時の恩にむくいるため、三河貞重に中村荘の中七貫文を与えたと伝えられている。この戦い以後戦乱が続く(約50年間)

宝徳元年(1449)正月、関東の武将たちは持氏の末子の永寿王を関東公方として支持した。そして9月9日に鎌倉に迎えて成氏と名のらせた。そして、上杉憲実を関東管領にした。しかし、成氏の地位は安定しなかった。(憲実の子の憲忠と争う)同3年10日憲忠の和解ができて鎌倉に安住できるようになった。成氏は、結城氏の恩を忘れず、氏朝の末子の成朝に結城家をつがせ、嘉徳元年(1452)4月2日に小栗66郷の地頭に任命した。

同3年12月27日、成氏は成朝とはかって上杉憲忠を殺した。(日本外史では、力士を門のそばにおいて、門をはいった時に殺した、とある)

この事件をきっかけとして、上杉氏が成氏に反抗して関東は大乱となった。翌4年正月22日、鎌倉を逃げた上杉房顕、長尾景仲らは小栗城にはいった。成氏は結城城にきて小栗城をせめた。この戦いで破れた小栗氏らは没落し、助重の領地は没収された。(政国の子政保は家名をおこしたと伝えられている)

戦乱期の領主

前にも述べたように、成氏が上杉憲忠を殺してからは、成氏は鎌倉にいらなくなり、康正元年(1455)から古河に移ったので古河公方とよばれるようになった。2年後の長祿元年(1457)足利義政の弟政知が鎌倉公方として京都から鎌倉に向ったが、成氏の一党や上杉氏の一族の反対で伊豆の堀越にとどまって、成氏を討伐しようとした。このため、政知を堀越公方という。

寛正3年(1462)11月29日 結城成朝が24歳で殺され、そのあとを氏広が継いだ。

文明3年(1471)になると上杉氏の成氏攻撃の力が強くなり、成氏に従がっていた長沼朝重が古河で討死した。(63歳)これは、幕府が4月13日に上杉房定に関東に兵を出すように命令したと関係があり、6月24日に古河城が落城した。(結城の一族や伊佐氏の一族も参加していたろう)

同8年12月になると常陸、下総国の諸将は成氏から離れていった。

同10年正月、成氏は上杉顕定と講和を結び関東の争乱はおさまった。そして、成氏は古河城に帰った。そして、結城氏に対して「伊佐荘33郷、長沼荘12郷、中村荘12郷」を正式に与えた。(実際には、享徳4年ごろか)

この間、伊達氏が中村八幡宮の修繕を2回している。1回目は、宝徳3年(1451)で次郎兵部少輔持宗である。(文明元年8月死亡、77歳)修繕場所は本社、拝殿、末社、御仮殿等である。2回目は文明8年で兵部少輔大膳大夫成宗である。(明応以後の9月25日死亡、53歳)修繕場所は社頭である。

「関東古戦録」によると、中村荘が一時宇都宮領になったと書かれている。その年代については書かれていないが、結城政朝が佐竹らの軍に破れた延徳2年(1490)ではないだろうか。そうして、伊佐氏の一族の中村氏が治めるようになったのではないか。以後も中村氏が実際の管理をしていたが、強い結城と宇都宮のどちらかに頼らざるを得なかったのではないか。

大永6年(1531)12月6日、結城政朝は宇都宮成綱の弟興綱(忠綱の叔父)を大将として、宇都宮忠綱と猿山で戦う。忠綱は破れて鹿沼にのがれ、興綱は宇都宮城主となった。中村の荘は以前から結城氏の持分であったが、数年宇都宮に押領されていた。(関東古戦録・年代を明応9年・1500・としている)

この時、水谷治持は中村12郷を攻めて、中村玄角を討ち取る功があったので、中村荘を結城政勝と水谷治持の二人で領した。(寛政重修諸家譜)

しかし、蟠龍記によると、天文13年(1544)10月7日に水谷政村が中村日向入道玄角を攻めて自殺させたとあり。玄角の子、小太郎時長が宇都宮の家来となったとある。また、永祿9年(1566)7月7日にも中村との戦いの記事がある。どれが正しいかは不明だが、治持の時のような気がする。

遍照寺について

遍照寺のおこりについて、「寺縁起」では、暦応4年(1341)で、醍醐三宝院賢俊僧正の開山である。そして、山号は如意山といい、寺号を宝珠院遍照寺という真言宗の寺である。としている。

「芳賀南部郷土誌」によると、五重塔の棟札に「暦応4年、従四位下源朝臣」と書かれているという。この源朝臣は二代將軍になる前の義詮であろう。

そのほか、遍照寺に伝わる古文書によると

「正月の祈禱を行ったことを知らせたことに対する謝礼の誓状がある。年数は書かれていない。成氏のもの二通と政氏のもの一通」

そのほか、成氏より芳賀兵衛入道(成高か)あての誓状ある。

また、結城晴朝の誓状がある。これは成氏・政氏を支持していた関係か、あるいは、遍照寺が領地内の寺だったかはっきりしない。

遍照寺は、足利氏の祈禱寺として存在していたことがわかる。特に、芳賀氏への誓状では寺領を荒している者がいるので、取締ってほしい。くわしいことは、遍照寺の長老から聞いてほしい。と書かれている。

以上で中世の社会についての記録を終わるが、不明な点が多く、まだまだ、研究をする必要がある。そのためには多くの資料(誓状など)を発見することが大切である。

江戸時代については各字の領主名を別紙でまとめたい。江戸時代に入る前は宇都宮氏の領地が、寺内・若旅・加倉・粕田・寺分・下大沼・上大沼・柳林・勝瓜・長田・伊勢崎・小橋。で、水谷領が大沼・中村・茅堤である。

江戸時代の中村の領

| 字名 | 慶長 | 寛永19年 | 寛文6年 | 天和元年 | 貞享3年 |
|-----|--------|-------|------|------|-------|
| 小橋 | 9年莊嚴寺領 | | | | |
| 茅堤 | 下館領 | 天領 | 土屋知行 | 天領 | |
| 大沼沼 | --- | --- | --- | --- | |
| 中 | | | | 板倉知行 | |
| 寺内 | 宇都宮領 | | | | |
| 若旅 | --- | | | | |
| 寺分 | | | | | 天領 |
| 柳林 | --- | | | | |
| 粕田 | | | | | 小田切知行 |
| 加倉 | --- | | | | |
| 下大沼 | --- | | | | |
| 上大沼 | --- | | | | |
| 長田 | --- | | | | |
| 伊勢崎 | --- | | | | |
| 勝瓜 | --- | | | | |

江戸時代の中村の領主・地頭

| 字名 | 慶長 | 寛永19年 | 寛文6年 | 天和元年 | 貞享3年 | 元禄年間 | 宝永7年 | 享保年間 | 延享3年 | 寛延2年 | 安永3年 | 天保年間 | 明治初年 |
|-----|--------|-------|------|------|------|----------|---------|--------|------|------|------|------|-------|
| 小橋 | 9年荘殿寺領 | | | | | | | | | | | | 荘殿寺領 |
| 茅堤 | 下館領 | 天領 | 土屋知行 | 天領 | | 10年有馬知行 | | | | | | | 有馬知行 |
| | | | | | | 10年土屋知行 | | | | | | | 土屋知行 |
| 大沼 | | | | | | 16年結城領 | | | | | | | 結城領 |
| 中 | | | | 板倉知行 | | 11年天領 | 宇郡宮領 | | | | | | 宇郡宮領 |
| 寺内 | 宇郡宮領 | | | | | 11年長田知行 | | | | | | | 長田知行 |
| | | | | | | 11年森知行 | | | | | | | 森知行 |
| | | | | | | 11年森川知行 | | | | | | | 森川知行 |
| | | | | | | 11年大久保知行 | | | | | | | 大久保知行 |
| 若旅 | | | | | | 11年浅井知行 | | | | | | | 浅井知行 |
| | | | | | | 11年加々爪知行 | | | | | | | 加々爪知行 |
| | | | | | | 11年加賀美知行 | | | | | | | 加賀美知行 |
| | | | | | | 11年中根知行 | | | | | | | 中根知行 |
| | | | | | | 11年本多知行 | | | | | | | 本多知行 |
| 寺分 | | | | | 天領 | 5年遠藤知行 | 11年大森知行 | | | | | | 大森知行 |
| 柳林 | | | | | | 10年天領 | | | | | | | 一橋領 |
| | | | | | | | | | | 一橋領 | | | 一橋領 |
| 粕田 | | | | | | 小田切知行 | | | | | | | 小田切知行 |
| 加倉 | | | | | | 5年西郷知行 | 11年今福知行 | | | | | | 今福知行 |
| | | | | | | | 11年天領 | 10年結城領 | | | | | 結城領 |
| 下大沼 | | | | | | 11年曲直瀬知行 | | | | | | | 曲直瀬知行 |
| 上大沼 | | | | | | 10年島田知行 | | | | | | | 島田知行 |
| | | | | | | | | | | 一橋領 | 7年天領 | | 天領 |
| 長田 | | | | | | | 天領 | 9年野村知行 | | | | | 野村知行 |
| | | | | | | | | 10年烏山領 | | | | | 烏山領 |
| 伊勢崎 | | | | | | | | | | 天領 | | | 天領 |
| 勝瓜 | | | | | | 10年天領 | | | | | | | |

三寶
遍照寺

源朝臣

年数は

か、あ

芳賀氏
いこと

まだ、
ること

る前は
卯林。